随想

春を待ちつつ

会員　羽柴　弘

どうも新年以来、朝寝のくせがついて困っている。年のせいか、五時ごろ一応熟睡からさめる。蒲団から頭をもたげて窓を見る。まだ暗い。床意も少々催しているがまあ辛抱出来そうである。蒲団も軽く、足も程よく暖かく、これが何ともいえなくたのしい。ついうつらうつらする。

やがて牛乳配達の車が窓の下を通る。コトン、コトンと囁ぶたき鳴らして通るのでよくわかる。これは毎朝のことで、半ば眠りながら聞くともなく聞く。

そのうちに、窓のカーテンが白みそめ、そのすき間からすでに隣家の大屋根が、すっきりと明るく見える。今日は晴れらしい。窓の外の梅の小枝に来ている雀が、二三羽しきりにさえずっている。朝の目覚めに小鳥の声は嬉しいものである。

さて気のせいか、寒中ながらどことなく春が土の下で胎動している感じである。枯芝はまだ芽ぐんではいないが、二三日前の雨で土は黒くしめっている。

西谷の通りを自転車で行くと、頭の上に西田邸の白木蓮の蕾がふくらんでいる。車の通りが多いのでオチオチ見ておれない。こんな時には通勤のコースを変えて、静かな山際を通るに限る。

白木蓮では、三カ丸近くの土屋邸のがすばらしい。白漆喰塀の上に高く、樹勢もよく茂り、枝一ぱいの蕾である。あたりのただずまいもよく、花時が待たれる。

同じく山際通りの山中邸にもある。以前は亭々とそびえていた老樹であったが、どうしたわけか枯れ損じ、数年前からその根本から生じた若木がすくすくと伸んで、今年は大きい蕾がたくさんついている。頼母しい思いである。

以上三か所の白木蓮、蕾をもつたその白い木の肌が、冬の陽をうけて明るく清々しく、私共の早春の夢を育ててくれる。

城下町佐伯のシンボルは、三カ丸の格門や石垣や、あちこちに残る武家屋敷の門や土塀などいろいろあるが、このような植物にも見る事が出来る。植物と言うても城山の松や馬場の松が姿を消してしまつた今日、椿や槙や木樒などいろいろな常緑樹もあるが、やはり白木蓮は春山水のような、特異な姿に心をひかれる。いわゆる花木（くわぼく）である。しかし花に限らない。今時季を迎えようとしているくろがねもちの、赤い実をつけた姿を愛したい。

この樹にはそよごとかふくらしばとかの別名もあるが、いずれも枝ぶりに風趣のあるこの樹からうける印象と、その呼び名がぴったりしないのはなぜだろうか。

くろがねもちは市内方々にあるが、養賢寺の庫裡の大屋根を背景にしてそそり立っているのが第一等。この樹を仰いで、葛に住まれる大内須磨子氏は次のように詠んでいる。

むらがりていまだも青きそよごの実清き真砂
を踏みて仰ぎぬ

さすがは閨秀歌人、行き届いた情感、鋭い写実、凡俗

の真似るところはない。まだ実は青い。晩秋から春にかけて数か月、赤い実をたわわにつけたそよごの姿を待望されているのである。

今年はすでに赤い実をその高い梢までかなりつけていたが、先日見たら意外に実が少なくなっている。鵯でも群って食ったものであろう。

山茶花や椿、小さいものでは千両や万両、冬の花木はこれからで、いたるところに花や実をつけて、私共の目を楽しませてくれる。それらはいずれも物の本に書かれ、俳句の季語にとりあげられているが、その中の一つ、蠟梅を私は心にとめている。西谷の豊海の裏門近くに一本あったが、今年はその黄色な花をひそやかに咲かしているであろうか。

梅はこれからである。市中大ていの家の庭、老幼の差こそあれ梅が植わっている。紅色の蕚で彩った蕾が日々にふくらみ、南向きの日当りのよい枝には、すでにちらほら咲いている。その一輪一輪が私共に春を呼んでくれるのである。

私は、今度企画されている佐伯市史の編纂に、このように人々な花の便りを、時季を追うて書いて見ようかと考えている。それは盆栽や鉢植のそれでなくて、塀の近く高く花を咲かせ、通りゆく街の人々を楽しませてくれる、主として花木の花の便りである。中には前に書いたような、ろう、椿もちのような実の美しいもの、銀杏や楓のように葉のきれいなものもとり入れて並べて見たい。春の花は言わずもがな、初夏の城山を渡い芳香でつつむ椎の花、谷あいの栗の花。秋なれば木犀やひいらぎの花もすきである。そして年の暮なら八ツ手や枇杷の花、その侍のうす暗がりにつわぶきの黄色い花があれば満点である。

佐伯市街、城下町が生まれて、もう四百年近くなる。年々歳々人は変って来たが、花は変らず昔の色に咲きつづけてきている。そして道行く街の人々に、そこはかとなく四季の移ろいを伝え、時の流れに黙々とうるおいを添えてくれる。物言わずひっそりと折々の季節に応じてさまざまの装おいを見せてくれている。

佐伯には、そのような花がいたる所にある。

最近「○○自然を守る会」というのが、はやりものの様に各地に結成されている。さまざまな公害から郷土の自然美を守ろうと戦う団体である。私もふる里の美しい自然を守るに人後におちたくない。目をぬぐうてこの歴史ある美しい里、人情ゆたかな郷土を見直したい。公害追放佐伯市民会議は、昨年来専ら佐伯湾を美しくする闘争に焦点をしぼっているが、本来興人のみを相手にしているに止まってはならない。

私はそこで、朝寝などしてうつらうつらという暮しから脱却して、清新で深刺と新しい年をすゝみたい。幸い春ももうそこまでやって来ているのである。

（おわり）

弥生町に野生椿の巨木

弥生町尺間、長畑部落に、当地では珍らしい野生の椿があることがわかった。場所は部落より更に高く登った白滝権現社の境内、周り約一米、樹高六米、枝張六米、樹令八〇—一〇〇年と推定され、小蜜柑の原種ではないか——と調査した佐伯農高の先生から知らされた。弥生町が天然記念物としてマーク、調査されることを希望する